

緑 中 通 信

～自分が楽しく、みんなも楽しく～

発行責任者：郡山市立緑ヶ丘中学校長 柳沼久裕

忘れてはいけないことがある！

～「あの時」の記憶から～

2月13日（土）午後11時3分、突然の地鳴りとともに、郡山市は、震度6弱の地震に襲われました。幸い学校に大きな被害はありませんでしたが、この地震が、「10年前の大震災の余震」であると知らされ、しばし絶句。自然の営みが、いかに人知の及ばないものであるかを知らされた気がしました。そこで、明日大震災10年目を迎えるにあたり、あらためて「あの時」のことを振り返ってみたいと思います。

平成23年3月11日（金）、私は、当時ある施設に勤務しており、次の日に行われる大切な行事のための会場設営を行っていました。会場設営を終えて、体育館から子どもたちと引き上げる途中、昇降口前で運命の午後2時46分をむかえました。大きな地鳴りが聞こえたかと思うと、ぐらぐらと揺れ始めました。「きゃー、地震だー。」という子どもたちの声。私も、その瞬間は、「強い地震だな。」ぐらいにしか思いませんでした。しかし、その揺れは、収まるどころか、縦に横にとだんだん強くなっていきました。昇降口のスチール製の下駄箱が、ガタンガタンと音を立て揺れたかと思うと、バタバタンと倒れていきました。その様子は、下駄箱が地獄のダンスを踊っているかのようでした。子どもたちの表情は、驚きから恐怖に変わり、声が出なくなりました。「姿勢を低くして、頭を隠せー。」私を含めて、先生方が口々に叫びます。揺れていた時間は、長いとはいっても数十秒。でも、すべてがスローモーションのように流れ、とても長く感じられました。

揺れが収まって、動けると判断し、すぐさま校庭に避難しました。校庭の中心に先生方と子どもたちが集まり、全員の無事を確認した後、にわかに空がかき曇り、強い風が吹き始め、雪というか、霰あられというかが横殴りに舞い始めました。それこそ今まで体験したことのない天気の劇的変化でした。「天変地異」とは、こういうことを言うのかと大げさでなく思いました。これが、私の震災の瞬間、及びその直後の記憶です。いまだに鮮明に記憶に残っています。

あれから10年。津波に加え、原発事故も起こってしまった福島県の復興は、まだまだ道半ばです。県内外、日本、いや世界中の人々が福島を想い、復興のために尽力していただいています。一方で、時が経つにつれて、この大震災の記憶が薄れ、風化している面があることも現実ではないでしょうか。

当時、ラジオ福島の大和田新アナウンサーが、ある講演会でおっしゃっていました。「私は、この震災を『東日本大震災』とは呼びたくない。『東日本大震災』では、いずれ、どこで起こって、どんな災害だったか忘れ去られてしまう。私は、『東日本津波・原発事故大震災』と呼ぶことにしています。」なるほどなあと思いました。

私にも、みなさんにもできること、その第一は「忘れない」そして、「震災を学び、震災から学ぶ」ということだと思います。みなさんにとっては、最も長期間にわたる宿題ではないかと思えます。せめて、年に一度、3月11日には、この震災に思いをさせ、家族と話したり、新聞を読んだり、ニュースを見たりするようにしてもらいたいと思います。

そして、最も大事なことは、「自分が楽しく、みんなも楽しく」です。「えっ、震災とどんな関係があるの？」と思う人があるかもしれません。校長先生が掲げている「自分が楽しく、みんなも楽しく」の根底にあるのは、実は「思いやりの気持ち」なのです。大きな災害に見舞われたら、まず「自分の、家族の、友達の、ご近所の方の命を守る」ことを考えます。次に、「その後の生活を支え合う」ことを考えます。これが、助け合いです。真の助け合いは、思いやりの気持ちがなければできません。日常の生活で、周りの人のことを思いやって言葉をかけたり、行動したりできる、しかも自然にできる人になることが、災害時に力を発揮できる人になることだと思うのです。今日この日、「自分が楽しく、みんなも楽しく」の意味をあらためて考えて、今後の生活に生かしてほしいと思います。最後に、この「自分が楽しく、みんなも楽しく」ですが、災害時にはこうあってほしいです。それは「みんなが楽しく、自分も楽しく」です。言葉をひっくり返したただけじゃない？と思う人があるかもしれませんが、そうではありません。何が違うのかは、みなさんそれぞれが考えてみてください。